

令和六年度入学試験問題 国語（五十分）

二月三日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は12ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アーサー・ランサム全集を初めて読んだのは大人になってからだ。海も山も旅も日常的に楽しんでいる男の子から、この本おもしろいよ、子どもの頃にうちの兄弟はみんな読んだんだと言われて、最初の一巻である『ツバメ号とアマゾン号』を貸してもらったのだ。

人にとっておもしろい本が自分にとってもおもしろいとは限らない。彼から分厚く無骨な装丁で茶色いしみだらけの本を手渡されたとき、^①はたして読み切れるか不安に思ったことを覚えている。児童文学という大まかなジャンルでも、男の子はどちらかというと空を飛び、魔法の国に遊ぶ幻想的なファンタジーを好み、女の子は地に足の着いた現実的かつ夢のある話が好きで、その趣向は大人になっても大きくは変わらないと思う。ランサム全集が心躍る冒険物語だと聞いて、私は異形の怪物や妖術使いが出てきて派手に戦うようなファンタジーだったら困るなと思いつつ、つまらなかつたらそこでやめればいいのだからと思って読み始めた。ところが、予想に反してそこに描かれていたのは、作者ランサムの体験をもとに、イギリスの自然を舞台として描かれた、子どもたちの等身大の冒険物語だった。

ジョンを長男とするウォーカー家の四人きょうだいは湖水地方にお母さんや生まれたばかりの赤ちゃんやばあやとともに夏の休暇を過ごしにやってくる。滞在する農場には艇庫があり、茶色い帆をつけたツバメ号が収まっている。海軍中佐で海外赴任中のお父さんに許しを得て、子どもたちはヨットで湖に出て、憧れの島に上陸し、キャンプ生活を始めるが、やがて島にはアマゾン海賊を名乗る二人組が現れ、さらにツバメ号の乗組員を快く思わない屋形船の男の襲撃を受ける……。

読み始めてすぐ、私は当時勤めていた会社を出て家に帰ると寢床へ入って本の続きを読むようになった。本が大きく重くて通勤電車で読むには不向きだったし、休憩中にそんな本を開こうものなら現実に戻って来られない危険性を自分でも察知していたから、もっぱら夜中に家で読むようにしていた。毎日家に帰るのが楽しみで、一冊読み終えると、次の巻を貸してもらった。今でも電車の間で待ち遠しくてたまらなかつた。こんな気持ちはいったい何十年ぶりだろうか。たぶん子どものとき以来だ。今でも電車の中で夢中になりすぎて本に顔を近づけて一心に読んでいる子どもがいるけれど、あんな感じだ。ランサムを読んでいるときだけは、本の世界に入り込んで、湖の上にヨットを走らせ、洞窟を探検し、草の陰から水鳥を観察し、ラム酒ならぬレモネードを飲んで

いた。彼らになにか事件が起こって感じる気持ちは私が感じる気持ちと同じだった。驚きも喜びも楽しみも怒りも心細さも必死さもやるせなさも同じだった。

そうして私は現実世界を離れ、本のなかの彼らと私だけの世界、^④ 喩えていうなら私だけの裏庭を楽しんでいたのだ。本を開きさえすれば、そこには自分が自在に楽しめる別の世界イコール裏庭が展開しているということが、物語を読むときのいちばんの喜びであり幸せであることは、子どもの頃から本が好きなら共通する思いであろう。

さらに私を夢中にさせたのは、彼らの冒険が、彼らにとってごく日常的な場所でも縦横に行なわれているという現実感だった。もちろん私にとっては遠い存在であるヨットであり湖だが、街の学校に通い、休暇を湖水地方で過ごす彼らにとって、それらはごく身近な存在である。そして彼らはその手の届く近くにある憧れや場所を巧みに反転させ、別の世界のものとしてとらえるのだ。ヨットは大帆船となり、湖は大海となり、今まで暮らした農場は先住民部落となり、きょうだいたちは船長以下乗組員となって冒険に乗り出す。子供ならではの自由な発想、自由な世界観を持ち、現実と非現実を自由に行き来し、自らの力と考えをもって自然のなかを真剣に冒険することの途方もないすばらしさが、そこには余すところなく存分に描かれていた。

つまり、自分なりの自由な発想さえあれば、^⑥ 新しい冒険の地平はどこにでも開かれるのであって、それはなにも本当の未開の地でなくていいし、自分なりの冒険の場であればいいということなのだ。

実際に彼らの冒険の舞台となっている湖も島も洞窟も山頂も大洋も、すでに昔は子どもだった大人たちの誰かが足跡を残している場所であって、彼らが人跡未踏の地に足を踏み入れるという冒険物語ではない。でもそれがなんだというのだ？ 自分たちにとってはそれが未踏の地であって、自分たちにとっての冒険でありさえすればいいのではないか？ 誰かがやったということではなく、自分がやるということが冒険にあっていちばん大切なことではないのか？ 行ったことのない場所に自らが行き、体験したことの無い困難に自らの力で対処し、知らなかったことを見て、聞いて、会得するということが、冒険の本質ではないのか？

その意味でいえば、私が南の小島で無人の浜に泳いで上陸し、ひみつが浜と名づけて貝拾いをしたことも、夜が下りてくるのを全身で感じながら山中を駆け抜けたことも、滑落の恐怖とともに雪の頂に登ったことも、砂漠のまんなかでラクダとキャンプしたことも、海底から魚の群れの向こうに光る海面を見上げたことも、言葉の通じない国の群衆のなかにひとり取り残されたこ

とも、小さな山頂の日の光に温まった大岩で昼寝したことも、町なかに残された丘陵をたどり道に迷ったことも、そのひとつひとつは私なりの冒険であって、私だけの体験であったのだ。

そして彼らは自分たちの海図を作っていく。湖から見える未踏の山はインドヒマラヤの高峰、カンチェンジュンガの名を冠する。湖の北端は北極であり、人々の集まる町はリオであり、湖に流れ込む川はアマゾン川、そして夜中に水草にオールをとられたよどみはタコの礁湖……。

身近にある日常が名前を変えるだけで非日常へと変わり、そこを冒険することで、自分だけの地図をもつ、それが地上のどこであつてもいい。文字どおり自分の家の裏庭であつてもいい。大自然のまただなかでなくても、家を出て北に百メートル行つたところでもいいのだ。はたして自分は家から北に百メートル先のことを知っているといい切れるだろうか？　そこにどれだけ自然があつて、どれだけの宇宙がまつていて、どれだけの未知があるかを本当は知らないのではないか？

地図を描けるということは、その場所を自分なりに知り、自分のものにしていくことに他ならない。私にランサムを貸してくれた男の子は、子どもの頃家の庭で飼っていた亀の行動範囲を克明に記した「カメ地図」なるものを作っていたという。南極に行ったことはなくても、自分の家の庭で起こっているすべてを知っていることも、ひとつの大きな冒険だといえるのではないだろうか。

もちろん、その対象が本物のカンチェンジュンガであり、本物の北極であれば、それは世界を自分の裏庭にしたことにもなる。名だたる冒険家も実はそのくらい感覚なのかもしれない。経験と技術と好奇心によって冒険の対象が異なるだけで、いかなる冒険家にとつても、自分の立てた目標に向かって知力と体力のすべてを尽くすことが最も重要なのであつて、最終的にはただその地図の縮尺が大きい小さいかだけの違いなのだ。

ツバメ号の子どもたちは巻を進めるにつれ、湖を航海し、島を自分たちのものとし、陸地に上がり、金鉱を探し、世界の屋根に登り、凍った湖上を北極に至り、七巻の『海へ出るつもりじゃなかった』では、ついにイギリスからオランダまで、北海を夜間航海する大冒険を成し遂げる。

大人であれば誰しも、今生きている現実生活ではない別の世界をもつことが、本来の自分に立ち返る近道であり、人生を豊かにする手段であり、かつまた自分を救ってくれる場所であることを、成長するなかでいつしか知るようになる。それはもちろん

閉ざされた自分のなかにもあるのだけれども、扉を開けた自然のなかにこそあると私は思う。なぜなら自然はいつも人間の存在をはるかに超えた別世界であるがゆえに、自分が思っている以上のなにかを必ず与えてくれるからだ。

今、世界中で人類が到達したことのない場所はたしかに無数にあるだろう。しかしその前に自分が到達したことのない場所はさらに無限にあるのだ。ここではないどこか、冒険すべき裏庭はどこにでもある。それは世界中に、身の回りに、そしてこうして X のなかにもある。

(若菜晃子「冒険の地平」『旅の断片』所収より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 — 線部①「はたして読み切れるか不安に思った」とありますが、筆者が「不安に思った」理由を四十字以内で答えなさい。

問二 — 線部②「異形の怪獣や妖術使いが出てきて派手に戦うようなファンタジー」とありますが、これとは対照的な表現を十字以内で本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問三 — 線部③「現実に戻って来られない危険性」とありますが、具体的にはどのような「危険性」を想定することができますか。「〜という危険性」につづくように、二十字以内で答えなさい。

問四 — 線部④「私だけの裏庭」とありますが、この説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分にしかわからない、本の中の秘密のこと
- イ 自分だけで楽しむことができる空想の物語の世界
- ウ 誰にも知られず、一人きりになれる現実の場所
- エ 自分だけが知っている自分の中の想像上の世界

問五 — 線部⑤「手の届く近くにある憧れや場所を巧みに反転させ、別の世界のものとしてとらえる」とありますが、(A)「手の届く近くにある憧れや場所」と(B)「別の世界のもの」とは具体的にはどのようなものですか。この——線部⑤と同じ段落の中から、(A)(B)にあたるものをそれぞれ三つずつ選び、そのまま抜き出して答えなさい。

問六 — 線部⑥「新しい冒険の地平はどこにでも開かれるのであって、それはなにも本当の未開の地でなくていいし、自分の冒険の場であればいいということなのだ」とありますが、「新しい冒険の地平」が「本当の未開の地でなくていい」のはどうしてですか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者にとって冒険とは自分にとってのものであり、他人が行ったことがあったり、やったりしたことでも意味があると考えられるから。

イ 筆者にとつては、冒険に挑戦すること自体に意味があり、冒険の内容については、どのようなものでもよいと考えているから。

ウ 場所がどこであったとしても、誰かが冒険だと認めれば、行ったことのある場所であっても冒険したことになると考えられるから。

エ 誰も行ったことがない場所は限られていて、誰もが行けるような場所でもないので、身近なところで冒険する必要があるから。

問七 — 線部⑦「世界を自分の裏庭にしたことにもなる」とありますが、「世界を自分の裏庭」にするとは、どのようなことを表していますか。それを説明した次の文の空欄に適することばを文中から二十字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

自分の家の裏庭と同じように、広い世界を(二十字以内)こと

問八 — 線部⑧「それ」が指し示す部分を本文中から二十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問九 文中の X に適する語句を、漢字二字で本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問十 この文章を読んで、あなたにとって「冒険」にあたる出来事を一つ取り上げ、なぜそれがあなたにとって「冒険」なのかわかるように八十字以内で説明しなさい。

二次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

言葉もまた、とても不思議なものだと思います。たとえば「ツクエ」とか、「イス」という音（音声）を聞いて、わたしたちはなぜそれがことばだ（注）とわかるのでしょうか。またなぜその意味がわかるのでしょうか。不思議だと思いませんか。

「ワンワン」や「ドンドン」といった擬音語や、「つるつる」や「ねばねば」といった擬態語（ぎたいご）の場合には、その音とそれが意味するものとのあいだに、何かしらつながりがありそうにも見えます。

① A 「ツクエ」や「イス」の場合には、それが意味する机や椅子とのあいだにそのようなつながりはまったくありません。それにもかかわらず、なぜそれが机や椅子を意味しているとわかるのでしょうか。

なかなか答を見つけにくいむずかしい問題ですが、この問題を考えるためには、一つひとつのことばではなく、言葉全体を考える必要があるのではないかと思います。

言葉は一つひとつのことばが密接に結びついた一つのシステムだと言っているのではないかと思います。わたしたちはあらかじめこのシステムをもっており、そのなかで「ツクエ」、「イス」なら「イス」という音を聞いているために、それがことばであると判断できるし、またその意味を理解できるのではないのでしょうか（手話の場合も、手の動き全体が一つのシステムとして機能しており、そのなかで一つひとつの手の動きが意味と対応しています。それは話し言葉の場合とまったく同じです）。このシステムのなかにない音は雑音として聞かれます。時計のコチコチという音やまな板をたたくトントンという音のように、そもそも言葉ではなく、理解の対象とはならない音もあります。 B 外国語の場合のように、言葉であるらしいということもわかつて、まったくちんぷんかんぷんで、このシステムのなかに入っていない場合もあります（オペラのアリアが意味がわからなくても耳にこちよく響くのは、それが言葉としてではなく、音楽として聞かれているからでしょう）。

言葉が一つのシステムであるとしても、それでどうして「ツクエ」という音を聞いて、「机」とわかるのでしょうか。その問いに答えるためには、まず、言葉がどういう働きをしているのかを考える必要があると思います。言葉の重要な働きは、個々のものを、それらがつ共通の特徴（とくちゆう）によって一つのまとまりにするという点にあります。 C わたしのもっている鉛筆には、短いのも、長いのも、緑色のも、赤色のもあります。わたしたちはそれらをひとまとめにして鉛筆ということばで呼びます。

D

②、言葉は個々の具体的なものを一般的なもののもとに集めるといふ働き、カテゴリ化といふ働きをします。

前にわたしたち人間の特質は、自分が思ったり、考えたりしていること、その意識のさまざまな働きをさらに意識することができるという点にあると言いました。その能力は、さまざまなものを同時に思い浮かべ、そこに共通の特徴を見いだし、その特徴を共有するものを一つのまとまりにして、それに名前を与えるときにも発揮されます。ふじや紅玉、つがるなどのリンゴには、ミカンやモモ、バナナなど他の果物にない共通の特徴があることに注目して、それらに「リンゴ」という名前を与えたり、リンゴやミカン、モモなどを、キュウリやトマトなどにはない特徴があることに注目して「フルーツ」と呼んだりするわけです。そのように個々のものを類に分け、それに名前を付与することを通して、人間は言葉を自分のものにしていったのではないかと思えます。

この類ないしカテゴリは幾重にも階層をなしています。たとえばフルーツにはかんきつ類やサクランボなどの核果果実などがありますし、かんきつ類にはミカンやキンカン、オレンジなどがあります。またオレンジにはバレンシアオレンジやネーブルオレンジなどがあります。このようにカテゴリは一つの階層化されたネットワークを形成しています。この類化の働き、あるいはネットワークの充実が、言葉の広がりであり、同時に世界の広がりであると言いうこともできるでしょう。豊かな言葉のネットワークをもっているということは、それだけ豊かな世界に住んでいるということでもあるのです。

そしてこのネットワークのなかのそれぞれのカテゴリは、先ほど言った「意味」、わたしたちが他の人と共有している「基礎的意味」に対応していると言いうことができます。そしてこの「基礎的意味」が指し示しているのは、Iです。わたしたちが「フルーツ」という音声越しに聞いているのは、バナナでもなく、オレンジでもなく、IIという普遍的な意味です。「オレンジ」という音声越しに聞いているのは、この少し小さめのオレンジでもなく、またあの熟して色が濃くなったオレンジでもなく、すべてのオレンジにあてはまる「オレンジ」という意味です。

「フルーツが好きだ」とか「オレンジはおいしい」と言うとき、意味されているのは、いままたまたわたしの家にあるオレンジだけではありません。またいままでわたしが見たり、食べたりのオレンジだけでもありません。将来食べるかもしれない、あるいは食べないかもしれないすべてのオレンジもそのなかに入っています。言葉が意味するのはこの普遍的なものです。

「フルーツが好きだ」と誰かに言ったとき、実際に「フルーツ」ということばのもとにAさんはリンゴを思い浮かべるかもしれ

れないし、Bさんはブドウを思い浮かべるかもしれませんが。そのようにそれぞれの人が思い浮かべるものが違っていたとしてもコミュニケーションには何のさしさわりありません。それは、この「フルーツ」ということばがすべてのものにあてはまる普遍的なものだからです。そのためにどの果物もそのなかに入ってきてますし、また、この「フルーツ」ということばは誰でもフルーツを見たことがない人でも使うことができるのです。そこに言葉の大きな特徴があります。

このように普遍的な言葉を手にすることによって、わたしたちは身の回りにあるものだけでなく、過去に存在したすべてのこと、未来に存在するかもしれないすべてのことについて考えることができるようになりました。このようにしてわたしたちの世界は一挙に拡大したのです。存在しうるものすべてが、さらに言えば、存在しないものも含めてあらゆるものが、わたしたちの思考の対象になったのです。これはものすごいことです。そういう力をわたしたち人間は言葉を通して獲得したのです。言葉をもつことによって、わたしたちは文字通り万物について考えたり、想像したりすることができるようになったのです。わたしたちにとって言葉がどれほど大きな意味をもっているか、それはどれほど強調しても、強調しすぎるといえることはないでしょう。

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。
(藤田正勝『はじめての哲学』より)

(注1) ことば………筆者は「ここでは、言語としての『言葉』に対し、一つひとつの語という意味で『ことば』とひらがなで書きます」としている。

(注2) 核果果実………中心部に堅い核をもつ果実のこと。

問一 文中の A D にあてはまる語としてみっとも適当な語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア つまり イ むしろ ウ たとえば エ しかし オ また カ さて

問二 — 線部① 『ツクエ』や『イス』の場合には、それが意味する机や椅子とのあいだにそのようなつながりはありません」とありますが、この部分について次の問いに答えなさい。

(1) 「それ」が意味するものとして、もつとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文字 イ 言葉 ウ 音 エ 意味

(2) 「つながりはまったくありません」とありますが、つながりはないとはどのようなことですか。四十字以内で説明しなさい。

問三 — 線部② 「言葉は個々の具体的なものをくategorizeという働きをします」とありますが、この部分について次の問いに答えなさい。

(1) 文中の X にあてはまる語としてもつとも適当な語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 理念 イ 想念 ウ 概念 エ 信念

(2) 「カテゴリー化」とありますが、これはどのようなことですか。本文中の言葉を用いて三十字以内で説明しなさい。

(3) 次の語句を「カテゴリー化」した時に、同じカテゴリーにならないものを語群の中から一つ選び、記号で答えなさい。

① ア 寝る イ 起きる ウ 眠り エ 覚める オ まどろむ
② ア これ イ どれ ウ どっち エ こっち オ どの

問四 文中の I にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある類全体ではなく、ある特定のもの（個物） イ 本来の意味ではなく聞こえてくる音そのもの
ウ 聞こえてくる音ではなく本来の意味そのもの エ ある特定のもの（個物）ではなく、ある類全体

問五 文中の II にあてはまる言葉を自分で考え、五字以内で答えなさい。

問六 — 線部③「わたしたちの世界は一挙に拡大した」とありますが、これはどのようなことか、本文中の言葉を使って四十
字以内で説明しなさい。

問七 次の選択肢ア～オの中から、本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「イヌ」という音を、実はわたしたちはことばとして認識していない。
イ 花子さんの発した「ネコ」という声と小動物の「猫^{ねこ}」という意味に、本来つながりはない。
ウ 時計のコチコチという音やまな板をたたくトントンという音も、言葉のひとつである。
エ カテゴリーはそれぞれが独立しており、そのおかげで広いネットワークを形成している。
オ 「イチゴが食べたい」と言ったときに「イチゴ」という音声^{きこ}が指し示すのは、基礎^{きそ}的な意味での「いちご」ではない。

三次の短文中の——線部のカタカナを、漢字に直しなさい。

- 1 結論をいったんホリユウする。
- 2 味方のシツサクで試合に負けた。
- 3 旅の様子をキコウ文にまとめる。
- 4 まだ考えるヨチが残されている。
- 5 自らソツセンして行動する。
- 6 よきデントウをひきついでいく。
- 7 古代の遺跡をフクゲンする。
- 8 コウキを逃がさずに成功した。
- 9 逆転の最後の望みがタえる。
- 10 間違えた人をセめるのはよくない。

令和六年度入学試験

二月三日 実施

東京女学館中学校



国語解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問二

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問三

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

という危険性

問四

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問五(A)

問六

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(B)

問七

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

こと

問八

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問九

問十

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

二問一

A											
B											
C											
D											

問二(1)

問二

(2)											
-----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問三

(1)											
(2)											

問三

(3)											
①											
②											

問四

問五

問六

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問七

--

三

9	5	1									
			える								
10	6	2									
			める								
				7	3						
				8	4						

評	点



受 験 番 号

氏 名